

ふたとおりの真実・文学と MfS 文書

佐々木 滋

Die gefährlichsten Unwahrheiten
sind Wahrheiten mäßig entstellt.
(Georg Christoph Lichtenberg)

1

東欧国家機構の崩壊に端を発する文学と国家権力をめぐる対決は、世紀末を飾る画期的な時代の変わり目の省察である。顧みるに80年代はユートピアの喪失、ブロック体制の解消、イデオロギーの粉碎、政治的プラグラティズムへの方向付けなどの性格をもっていた。国家公安省（以下シュタージ、もしくはMfSと略称）・証拠文書法^{*1}の成立から今日では国家権力の意図を探れる通用門が開かれた。この文書は第二のテキスト^{*2}とも称されている。MfSは体制反対派、教会、文学界などからの批判的な声に接した。「政治的・イデオロギー的反動怠業のないところに政治的・地下活動もない。」これがかれらのスローガンであった。逆に言えば政治的・イデオロギー的妨害工作のないところに、政治的・地下活動もないことになる。かれらのプランは明白な敵・味方の図式に従う。「MfSは国家の中の国家」ではなく党の盾と剣であった。MfSはその活動においては党大会の指示をZKdSED（社会主義統一党中央委員会）ならびに政治局に左右されていた。中央委員会、文化省、MfSのチームワークが具体的に説明されるならば、三角形となり、その頂点にはZKdSEDの文化局が位置する。諸々の指令は三角形の底辺の両端をなす文化省とMfSに伝わるしくみである。その逆にMfSの各種情報はZKもしくは文化省に直に伝わった。のみならずMfSは若干の諸例ではあるが法案の立案もおこなった。文化領域でのシュタージの活動は、過去15年間中とくに1976年のピアマン事件^{*3}の体験から特徴を帯びることになる。この再発を回避しようとしてかれらは戦略を変更する。1978年の第20本部局の活動計画では、質的なIM要員の拡大、重要地点の補充が戦略となる。これが80年代において最初の実を得る。サシャ・アンダーソン^{*4}（又の名をダヴィド・メンツァー、フリッツ・ミュラー）、ライナー・シェドリンスキー（別名、ゲルハルト）らのIM投入もそうであった。かれらは単に統制の制限を受けずに、文学の舞台・反対派の場の中心で積極的な活動を繰り広げた。シュタージから回されたのか、あるいは自分の信条からなのか、指導幹部とIMとの間の関係は極めて錯綜し矛盾したものと想像される。IMのものたちが自分たちの活動を企てたにせよ、かれらの報告はれっきとして残された。シュタージにとって敵を見分けることは最後まで必要であった。若干の作家たちが明らかにシュタージとの共同作業において自己を犠牲にした自己欺瞞はそのことを何ら変えるものではなかった。つまるところシュタージは改革の提案に関心を持つのではなく、30年代に得られたかれら

144

(47)

* 一般教育 助教授 ドイツ文学

のスターニリズムの根本的方針に従ったのである。彼らの手段はOPK（実効的人物統制）とOV（実効的処置）である。個人的な朗読会や自費出版の雑誌などへの参加で注意を引くものはOPKを受ける。この場合接触の記録として「敵対的・否定的立場」の識別が問題であった。もしも広い範囲への疑いが結果として生じた場合OPKはOVに変えられた。「実効的処置」を通じて罰則行為の諸々の証拠が整えられ、当該者は文書処理され、切り崩される。記録文書を評価・査定を行う場合、これが誰のために計画され、いかなる目的に使われようとするものであるかを忘れてはなるまい。幾重にも署名入りで誓われる「文書の真実」は、所詮シュタージの選択的な実体の見解である。芸術家や反対派との付き合い上、客観性は決してシュタージにとり問題ではない。たとえ事実の正しさに関心があっても。かれらの目標は結局、刑法上重要な資料の調達であった。

2

1979年の夏に書かれ1989年の11月にさらに手を加えられたクリスタ・ヴォルフの自叙伝的小説『Was bleibt』*6は翌年1990年6月5日に出版された。この小説はシュタージの職員に密かに監視されるヴォルフと見間違えるほど類似した女性作家の生活のある一日を綴ったものである。この中の数カ所では、若い男に監視される語り手「わたし」は彼女のなかにある「わたしの心の中の検閲官」の良心の声との対話にあらわれる。この物語の女性主役は他者に監視されるばかりか、みずからのわたしにある「パートナー」、「裁き人」、「同伴者」などと称される自己批判の裁判所によっても監視される。「憤慨してわたしは知りたかった。誰がいったい彼（この同伴者）を差し向けたのか。彼は冷然とそれはあなたですよ、と答えた。」この心の中の対話にはこうした「自分」についての沈想がつづく。「わたし自身。それは何者であったか。わたし自身を自分に作り上げた多様に存在するもののいずれなのか。これは自分で知りたかったことだろうか。これが自分で労ぎろうとしたことだろうか。あるいはわたしの家の前の若い者達のように相変わず言いなりにしようとしたあの第三者だろうか。」この自分の一部が社会主義統一党（SED）の国家権力に順応しようとするものであることは否定できぬ。逆の見方をすれば作者はこの本人自身の分身をのちに自分から切り放せると漠然と望む。「わたしが必要であったのはこう信じられることだった。近いうちにわたしがあの第三者をわたしからすっかり禿落して、押し出せたら。実際わたしはそれを願った。長い間をみると、このわたしのなかの第三者よりもむしろ外にいる若い者達に耐えられたらと思った。」ひとりの女性作家がシュタージの犠牲者もしくは国家権力に反対する抵抗のヒロインの目的であとから補足的に練り直されたかもしれぬ登場人物として、「警告する監視機構の末端」を割り当てられたこの特権をもつ小説の女性主役はおよそ役立たない、不向きである。

この小説をめぐるさまざまな論議を呼ぶことになる*7のだが、1990年の6月以降、戦後史にも稀にみる激しい論争が展開される。90年6月10日にはポツダムのツェツェーリエン宮殿にてベルテルスマン財団主催の東西ドイツの作家、政治家、ジャーナリストが招待される。論議の中心には文学の自主性喪失への恐れと西側の文化企業体への危惧感がみられ、特に居合わせたヴォルフ、ステファン・ヘルムリー等がSED政権の時代に批判的作家の迫害に反対する表明を不十分もしくは全くなし得なかったこと、またドイツ民主

主義共和国（DDR）の崩壊後には体制の犠牲者と抵抗の闘士と自ら称していることに非難の声があがった。SED 政権の解体、西側デモクラシーへの方向転換がなされたこの状況下に、あの国家社会主義の瓦解のあと同様、全体主義体制の反対者もしくは犠牲者のいずれかであり得ることはだれにとっても有利なことであろう。こうした状況にあって突如変わる事態に適合しようとしたり、自分の過去を正しい姿に見せようとしたりする遅きに逸するヴォルフの試みとしての小説を読むことも上述したこととさしてかわるまい。

ヴォルフへの攻撃は彼女のモラルの清廉潔白性ばかりか文学的資質をも否認しようとする。これは西が、全体主義から解放された東を単に支持するばかりか、戦勝国気取りの独断で文化的にもランクの格下を行い、占領し、自主的アイデンティティーをすべて残かまわず奪う、と多くの者が疑うことと類似性がある。つまりヴォルフに下される無資格の宣言は文学の領域での西の優越性と東の劣等性の陳列化であり、SED 解体が DDR 文学の解体と等式で結ばれるかのような印象は否めない。ヴォルフの小説に端を発するこの論争はいつしかそれ以外の方向性をたどる。当初よりヴォルフのテキストをめぐる以上に他のことへの言及が見られ、ヴォルフは論争のきっかけを与えたにすぎないような観を呈する。「クリスタ・ヴォルフをめぐるのが問題であるが、詳しく言えばクリスタ・ヴォルフは問題ではない」（ピアマン）とされたり、彼女は単なる「暗号」にすぎなかったりする。また、東ベルリン在住のルッツ・ラーテノフは「西の人たちがヴォルフを擁護しなければならないと思うかたくなさ」を視野に含む。ヴォルフがナチの時代下とその後に亡命者文学と国内に残った作家達をめぐるどのように導かれたかという観点も捉えられる。DDR にとどまった他の多くの作家の身代わりに西側から攻撃される言葉の刺は、トーマス・マンの「思い込みかもしれないが、およそ1933年から45年の間にドイツで印刷され得た書籍類はわたしの目には無価値以下としか思えず手に取るのもよくない。血と恥による悪臭が染みついている。それらはどれもみな足で踏みつけられたらよい。」（『なぜわたしはドイツに戻らないか』1945年*8.）という厳しい判定を思わせると同時にドイツを離れた亡命作家に「国内に残ろうとしそうせざるを得なかった人々をあまりにもみさかいのない軽蔑をこめて見下さぬよう」アピールした公開書簡（ノイエ・チューリヒ紙、1936年）が、多少和解的で多種多様な状況に DDR に残された作家達と一緒に呼びかけるために引き合いに出されたりする。

DDR をナチの政権と比較することの問題も浮上する。（ユルゲン・シュテルケ）同列視できぬというのが一般的である。「DDR 国民はシナゴグの焼き討ちも全面戦争も望まなかった」（ハンス・マイヤー）。同じような論調に「コミュニストの支配の要求は、ナチのような権力への陶醉感に起因するのではなく社会の正義によって立派な理想を貫徹する試みに起因する。そしてその始まりにおいて強迫と支配権力が理想への信用を失わせたがために、この理想が不合理に至るまで倒錯されたに違いなくとも、この恐ろしい実験的試みの挫折にはやはり DDR 国家と DDR 文化の多くの代表者を非難できぬある種の悲劇が備わっている。この権力の産物である妄想性はナチのテロ国家のような愚鈍と残忍性による単なる発作ではなく、啓蒙の弁証法からも理解可能な、いわば、理性の熱病的発作であった。真実探求の批判的具たることの理性が停止し、真実を発見できたと思ってそれを計画上に貫徹しようとする限り、その理性はもはや自由に仕えるのではなく奴隷状態をつくる

のである」(ハンス・クリーガー)。ヴォルフへの攻撃のさいに DDR をナチと同列に据えるフランク・シルマハーも同列視への制限を覚える。

この論争は西側に来た体制批判者達を東に残った者たちにも対決させる。「残された者たちの殆どは彼らの沈黙によって常にこと新たにわれわれの国籍を剥奪した。」とライナー・クンツェは1977年4月に DDR を去らねばならなかったヴォルフ・ピアマンの国籍剥奪の5ヶ月後とりわけシュテファン・ヘルムリーンを非難したことがあったが、こんどは控えめながらもクリスタ・ヴォルフに向ける。「二つのシステムからの知識人間での最初にして実際オープンな対決」(ギュンター・クーネルト)、「この記事は扇動でも乱痴気騒ぎでもなく、来るべき論争を吹きおこすもの」(ヴォルフ・ピアマン)として論争を煽ったウルリヒ・グライナー、フランク・シルマハーの記事を正当化する。

ヴォルフへの批判者は多くが西側の若い世代である。1954年生まれのハンス・ノル(作家ディーター・ノルの息子)もその一人で84年から西ベルリンで批評・作家活動をする。かれの批評は DDR の事情に疎い西側若手批評家と異なる体験を備えている。さらにスターリニズムの犠牲者となり DDR 国内で実刑を受けたり、追放された知識人らは西ドイツの敵クリスタ・ヴォルフの側にまとまりある会派を形成する。レフ・コペレフ、ヴァルター・ヤンカ^{*9}はヴォルフへの攻撃に激しく抗議する。

3

カール・コリノは『シュタージの協力者としてのヘルマン・カント』^{*10}のなかでアルフレート・カントロヴィチュ^{*11}の著書「ドイツ日記」から次のような箇所を引用している。

“わたしの助手達の内でも専門的にもさほど才能があるとも思わず、当初うかつにも信用してしまったこの男が間違いなくヘルマン・カント^{*12}であり、かれが SED の大学事務局からスパイとしてわたしに配置されてたことはあとで知った。(・・・) 1958年の8月半ば Bansin にいるわたしのところに、ほとんど理解に絶する卑劣な行為の裏切り者から警報を告げるようなこんな知らせが舞い込む。それは DDR の警察がわたしのところへの家宅捜査指示を始めたに違いないというものだった。そうなれば日記、手紙類、話のメモなどが探し出され、これらが長年に及び、場合によっては永遠にわたしばかりが政体の刑務所の壁奥にぶち込まれるのではなく、わたしの友人達にも危ない目に遭わせたことだろう。”

実際、家宅捜査は1957年8月20日に行われたという。この予期せぬ事前連絡にてカントロヴィチュの最も大切な書類は難を逃れたことになった。かれの「ドイツ日記」(1959/1961)が出されてからスパイ・カントへの非難が世に知られることになる。カントは1991年に回想録「Abspann」を著す。そこでは言葉豊かにフンボルト大学でかれの師であったカントロヴィチュの日記の操作に罪を被せたり、自分を助手に推薦した誉め言葉などを引き合いに出す。シュタージの文書が公開された昨今、カントが先の家宅捜査の14日前の8月6日にシュタージ・ベルリン支所 V/6 と接触を計っていたことが知られた。しかしカントがその家宅捜査に確たる関係があったかどうかはまだはっきりしていない。その

141 可能性はカントロヴィチュの遺稿のなかか、あるいはガウク・文書保管所から今後あらわ
(50) れることはあり得よう。カントがいかにしてシュタージに取り込まれていったのかという

疑問もあろう。1957年の夏から2年間カントは「tua res」という学生雑誌の編集に携わる。この雑誌はシュタージの言葉を借りると「もっぱら西ドイツおよび西ベルリンの大学に所属する者に向けられた」ものだという。カントはこの頃のことを回想録のなかでこのように述べる、

“直ちにわたしの編集部は新聞学やマスコミ論が何たるかなど頭にないようなむしろその反対であるような訪問者に見舞われた。既に取り壊されたフリードリヒ街とベーレン街角の仮設建物5階への急勾配な階段は3人の男たちを3日間それぞれに煩わした。かれらは話しても、聞いてみても本誌が問い合わせようとした大学生ではなかったし、たしかにかれらは老けてはいても、学生新聞や5階には十分な若さではなかった。かれらにとって編集上の離反自体への関心が共通点であるようにみえた。わたしらの非常に面白い雑誌の限られた分量を目の当たりにして彼らが一様に言ったことはおよそこうであった。それは各種情報の過多が推測され、そしてわたしの雑誌に使えないと分かったものは一切屑籠へ捨てる代わりにかれらにできないか、というものであった。(・・・) わたしは最初の男に真実に即してこう話してやった。雑誌「tua res」はもっぱらカント、ランプニッツ、ジョン・ロックらの意味における啓蒙に役立てなくてはならぬことがわたしの委任者とわたしとの間で結ばれた取り決めである、と。それだから自分の落ち度が引き起こす未熟さから人間の出口のために書こうとする寄稿者が自分でやっとうと手に入れた成年に妨げるかもしれないことは一切回避されなければならないのだ、と。この人物はわれわれの出会いの場がのち屋根もろとも取り壊されたようにわたしの人生からも消えた。”

ここにはカント自らの回想録を、語らぬための自己変容化と過去の伝説化がみられるのである。こうした問題はシュタージに関わりを持った作家とその文学的立場を見て行く場合、今後とも必ずやその視点に据えてかからなければならない。ヘンリー・オットー(HA II)と称するカントにとっては偽名リヒターという名で知られる人物がカントと関わりを持つ。当初シュタージはカントを接触要員(KP *¹³)とみなし、慌てずに散発的に接触を保つ。1960年シュタージ(HAV /I)はカントを秘密情報提供者(GI *¹⁴)にさせる目的で私的協力者のための予備文書(IM-Vorlaufakte *¹⁵)をあてがう。これは「ドイツ作家同盟(DSV)の総会準備の保全目的に同GI候補が作家系統での獲得のために整えられる」ものであった。1960年には管轄の移動が行われカントはスパイ防諜機関に権限を持つHA IIからHAVに移される。1960年11月30日ヘンリー・オットー又の名リヒターはかれのお気に入りブルーノー・パロッホ少尉のもとに転任させる。パロッホは次のように書き残す。

“同志オットーはK(カント)と既に暫く前から接触を保ち、シュタージ第二の人物の訪問を受けたこの前の集まりの際にかれを準備したために接触開始は支障無く行われた。作家Kに対しては紹介時にヴェグナーと称する署名者(パロッホ少尉)はMfSからDSVへのレポ役を務めた。さらにKは、1961年春開催の総会準備にあたり一連の問題に関心が見られたためこれらはなお個々に話し合われるべきものと説明される。同志カントは躊躇なくこうした情報提供を約束す。(・・・)かれの任務はDSVの代表者会議準備のための分析に関する作業部会指導部にあり・・・カント氏は秘密を守りDSVの利害関係を保護する義務を負う”

さらにシンドラー中尉とトライケのメモでは、

“集まりの際にこの候補者は情報は与えるものの、かれに非常に近い人物たちに関する諸情報にはまだ抑制がある。署名者の見解ではこの候補者との絶え間ない計画性のある協力時に抑制がおかれるであろう。わが編成隊（HA V/I/IV）に対してこの候補者はこれまでに文書で報告を行っていない。これまでにこの候補者に関し与えられた諸情報は実効的価値を持つ。それは候補者が実効的監視下にある人物たちとの接触を有するからである。・・・この候補者は率直で信用できる印象を与え MfS と共謀して協力する心構えがみられる。この候補者とはすでに好ましい接触があるために、また暗号名マーチンを受け入れたためにこの候補者の住居を（ベルリン・ホーエンシェーンハウゼン、ホルンベルガー街29）に義務づけることが提案される。責務の後、再度、共謀遵守の必要性の説明ならびに、作家、ジャーナリスト系統での任務設定がおこなわれる。集まりはさし当たり候補者の住居でなされ、会合が共謀の住宅にて実施される意図はこの視点下にある。”

コリノによれば1963年の約半年間で12回、合計18時間に及ぶシュタージとカントとの共同作業が始まった、という。

4

「作家たちシュタージ文書の閲覧を要求」*¹⁶とした見出しではおおよそ次のような動きが報じられた。これはシュタージ文書の閲覧とこの問題の公的処理をライブチヒで要求するもので、その集会は作家のシンポジウム「抵抗のポエティック」と銘打って旧ライブツィヒ証券取引場で開かれた。声明は「閲覧の権利が制限された諸規定により空洞化することは当該者の権利ある諸要求にも社会一般の法の安寧にもそぐわない」とするものであった。作家エーリヒ・レストは文書閲覧の可能性の希釈化に対し「この法律が成立したらわたしはこれを破るつもりだ。このことが今わたしが用いる抵抗の形だ」とする立場を表明する。この間に連邦議会は閲覧のための細則を絞っていた。2日間のシンポジウム「ライブチヒ・文学の秋」の中心問題では文学の可能性と限界について論議されたという。ここに参加した作家はゲルハルト・ツヴェレンツ、エーリヒ・レスト、ヴェルナー・ハイドツェク、ヴォルフガング・ハーゲヴァルト等である。DDRの全体主義政権への知識人の共同正犯の問題と罪の問題が出された。1973年に政治的理由で禁固7年の実刑を受けたウルリヒ・シャハトは「知識人の背信」という一大事件は志を同じくするものたちと並んで独裁の持続決定と一緒に関わったクリスタ・ヴォルフ、フォルカ・ブラウンなる名前に探り当てられるべきだ」と述べれば、これに対しクラウス・シュレジンガーは「ヴォルフ、ブラウン等の人間に対しは、とぎれることのない金銭独裁とは異なる社会を心に描いていることを認めざるを得ない」と答える。ハレのディーター・ムッケは「わたし自身がバケツ一杯の灰を頭から降り被ることは念頭にないが、そうした作家たちの作品の一行も読まずに東ドイツの文学に判決を言い渡すのは思い上がりだ」とした。

*

139 密告の秋とでも言うべきその年のフランクフルト書籍見本市のスタンドでヴォルフガ
(52) グ・ベーベル（南ドイツ紙の寄稿者）は、詩人ライナー・シェドリンスキーとサシャ・ア
ンダーソンにシュタージ番号があるらしいという噂を聞く。*¹⁷この二人は後で述べるよう

に東独80年代の拒絶の主唱者であった。彼らの文書がヴォルフ・ビヤマンに関わるものらしいという。その足で会場の Galrev 出版にも赴くことになる。この出版社はライナーとサシャが二人で創ったものでその年2度目の展示参加であった。その出版プログラムは「まじめで根気強く有益な共同作業」の産物だと FAZ 紙からの賛辞を得てたいものであった。居合わせたシェドリンスキーとヘーベルは数週間前にベルリンのプレントラウワーベルク近くのカフェで会ったばかりであった。噂で広まる非難にも冷静に反応し、余韻を残す言葉「でも少し興味津々です」と答える。翌日ヘーベルはビヤマンに電話取材を行う。得られた内容は「アンダーソンの名前は知っているがシェドリンスキーは聞いていない。どこそこから情報を得たなどと思うのは浅はかな無知で XZ 市の XZ 紙の XZ の人間に言うことは何もない。文書を渡されたかどうか、それが誰かなどとも答えられない」と怒鳴られるものであった。シェドリンスキーは「Aufbau 出版の女性編集者からその話は後2・3の作家に関係し、他はないと電話で言われた」ことをヘーベルに話した。かれ自身は15年間もシュタージの尋問に何度も応じなければならなかった。その間隔は3、6、9ヶ月といったものだという。「かれらはわたしからも資料を取っていたし、わたしはむろん数え切れないほどの尋問調書に署名した。ただ問題は番号が在るか無いかだ。これだけが公開のために意味を持つ。」

DDR においては80年代前半から政治的反対派とならんで文学・芸術の反対派は存在し得たのだろうか。「しかし全ての反対派グループはシュタージの転移に侵され喰い破られた。弁護士シュヌール、ヴァイセント・ベーム、ユッタ・ブラバント、ハイムキント・モニカ・ハガー、とても才能豊かであったが今では自己喪失に怯えてしまった詩人ハインツ・カーラウ、才能のない喋り屋にして間抜けなシュタージのスパイのサシャ（・アンダーソン）。この男は相変わらずクールにミューズの倅を演じ、自分の文書が決して浮上しないことを願っている。MfS は反対派をよく切り崩せるようにとかれらのくだらない連中を反対派のトップに差し向けた」（ビヤマン）。ビヤマンがこう言うようにこの時代の文学運動は孤立した文学とともにシュタージに管理されていたのだろうか。クリスタ・ヴォルフの小説をめぐる論争以後、ここでも激論の解発因はシュタージの主題設定であることに違いはないが、反対派の価値評価もそれに加わる。ただし70年代末に国外に出たり、市民権を剥奪された作家やあるいは80年代の上品なサブカルチャーの、DDR にとどまった文学者、芸術家たちのうちの誰が DDR 文学の反対派を代表し得たかという問題だけが大切ではない。

抵抗の形態やその平面段階でのことも大切であろう。80年代の自主的文学はその推進力としてその象徴的人物たちの一人とみられたサシャ・アンダーソンがシュタージの情報提供の協力者であるという非難によってあとあとまで評判を下げた。非公式の文学と芸術は反対派のリーダーを打ち破るために育てあげられたのだろうか。（ビヤマン、ラーテノフの言うように）もしそれがそうだとすれば、だれが切り崩されたのかと問われよう。そこでは70年代、80年代のユルゲン・フックス、フランク・ヴォルク・マッティスの逮捕といった体験、ビヤマンの市民権剥奪、それに続くある作家世代全体の EXODUS も挙げられよう。こうして出てゆくことにヘルマン・カントはただ嘲りと愚弄を残した。またそこには居残って国家との持続的対決からあらゆるイデオロギー的要求の拒否により、少なから

ず力を消耗し、身を守ろうとした諸々の体験もある。さまざまな DDR の体験と共に異なった生活像が互いに衝突しあっていることは確かである。突発的とも思える論争、諍いは文化的行動をめぐるモデルの問題でもある。その発火点には諸々の心的な態度があり、文学なのではない。この議論のディレンマは二者択一を許さない。DDR を去ったものだけが清廉潔白なのではなく、残ったものは買収された。ハレ、ライプチヒ、ドレーズデン、ベルリンなどでの若い芸術・文学界の制限付きの独立がシュタージによって演出された芸術的自己欺瞞であったのか。統制されたのではなく、妨害されたと考えればこの問いは不必要であろう。シュタージが若者の文学について意識的な操作に関心があれば、その文学も DDR で出版されていたろうか。全く逆にラーテノフ、ツィンガー、シェドリンスキー、デーリングそしてアンダーソンといった他の多くのものたちは最初は西側で出版されたのである。

DDR の70年代半ばには、多くの若い作家達はまだ出版社の情熱が感じられる選集や文学雑誌に新しい生命感を見い出していたとされている。しかし80年代始めにはこの世代の名前が見られなくなる。かれらは出版できない作家のブラックリストにみられる。こうした状況下ではもっぱら DDR 国外に出るか、自分のテキストを自分で広めるかの二者択一が残された。こうした出版形態の特殊性が80代の者たちにも積み重なったために、一つの文学運動の総体が DDR 固有の社会資本によって説明されなければならない、とする見方もある。ところで最初の先駆者達は文学的・グラフィッシュな小雑誌を創刊する。それらは、『ラテルネマン』（発行人、トーマス・ベース）、『パピアータウベ』（ディータ・ケルシェック）、1982年からはドレーズデンでみられた『UND』（ローター・フィドラー）、そしてベルリンの『ENTWERTER/ODER』（ウーヴェ・ヴァルンケ）など。これらの出版物は最初は秘かに広められたが80年代の半ばよりザクセン州立図書館、ライプチヒのドイツビューヘライなどでも閲覧可能となる。最も有名であったのは『ミカド』、『シャーデン』、『アリアドネ・ファブリック』などである。出版許可をされぬ印刷物のこの種の蔓延がゆゆしき法的結果を幾度も抱え込んだことからドレーズデンでは1982年から84年に広まった『UND』、ハレでは1985年から86年に広まった『Galeere』は発禁となった。

このような新しい文学世代を統合しようとする試みがあった。最初の発端として挙げなければならないのはフランツ・フューマンがイニシアティブをとったアンソロジー出版計画である。いわゆる「アカデミー・アンソロジー」の禁止は1981年であった。これはビアマン事件以後、硬直した文化的前線の者たちの間である仲介をめぐる労されたあらゆる試みの挫折を象徴するものである。これは若い作家世代の追放と犯罪行為化の始まりをも意味する。1981年はこのアンソロジーにシュタージが注意を注ぐ。このアンソロジーは芸術アカデミーの名においてフランツ・フューマンが委託され、同年11月には同アカデミー会長コンラート・ヴォルフとギュンター・リュッカー（文芸・正しい言葉づかいのセクション責任者）に引き継がれた。この集まりでフューマンから、若い詩人達の作品発表の機会に恵まれぬ状況を憂慮する見解が述べられる。コンラート・ヴォルフの側ではフューマンの挙げる詩人達の名前のおおかたも知らぬ有り様であったから、芸術アカデミー

137 (Adk) の雑誌にこれらの詩人達のグループを紹介するようにフューマンに提案する。フ
(54) ユーマンは雑誌『Sinn und Form』の編集員の若い作家担当として起用されたことは知ら

れていた。ウーヴェ・コルベ、フランク・ヴォルフ・マッティースなどの作品公表はフューマンの推薦で日の目をみた。フューマンは作品の収集をウーヴェ・コルベ、サシャ・アンダーソンに委託した。この二人はそれぞれ別の文学グループを代表する。コルベは詩集『hineingeboren』（1980年）で有名になり、自費出版の雑誌『裸の皇帝』、『ミカド』を表す。他方アンダーソンはドレースデンで出版シリーズ『ポエ・ジー・アル・バム』で名を知られていた。フューマンが81年にコンラート・ヴォルフ宛に伝えるところでは、さしあたり1958年から1940年までの世代にみられる勢力に関する概観的知識が刊行側でも大切であり、選抜規準は文学的質であり、従来発表の場がなかった状況、同世代における作品の受容とされる。年齢制限はヴォルフガング・ヒルビヒの40歳を上限とした。サシャ・アンダーソン、モニカ・マロン、ディータ・シュルツェ他の28名の詩の作品が集められる。この作家達は互いに異なる文学構想を抱き、お互いに知らない者たちであった。原稿は81年の夏にエルケ・エルプのおころでまとめられAdKに渡される。1981年の9月15日にフューマン、コルベ、アンダーソンはリュッカーのもとに呼ばれて、「このアンソロジーの作業は終了し、こうした収集のためのAdKの委任はあり得なかった。もし、この作業が中止されなければ、この収集作家は敵対的・ネガティブな結社の嫌疑を免れない」言われるのであった。出版関係のフューマンの面目を考慮してか少数の名の知れた詩人のものを印刷する試みが計られる。アンソロジーに名を連ねたカーチャ・ランゲは自分が学生として所属するライピチヒのR. ベッヒャー文学研究所の所長マックス・ワルター・シュルツから参加を降りよう迫られたり、ドレースデンの技師ミヒャエル・ヴステフェルトは職場を失うかも知れぬと脅かされる。ギュンター・リュッカーのもとでの話についてシュタージの要約文書では「アンソロジー原稿のための意見はコルベの場合納得のいかないものがたった」とし、コルベに対しては81年9月25日に実効的人物統制（OPK）の“Poet”なるものが配置され、のち実効的処置（OV）の対象とされる。「コルベとアンターソンによって編成されたいわゆる後継世代の作品はわずかな例外に至るまで手元にある評価では、現実社会主義と組織体に敵対する攻撃的にして反革命的立場を帯びたものと特徴づけられる」。(シュタージ文書)

クラウド・ミヒャエルによれば^{*19}、このアンソロジー計画は三つのディレンマを抱えるという。作家たちは未組織で出版社にも文化当局者にもほとんど知られていなかったこと。第二には、それでありながら多くのものは西側で出版可能な手段をもっていたこと。第三はフューマン、フォルカ・ブラウン、リヒャルト・ピットラス、ライナー・キルシュ、ゲルハルト・ヴォルフ他の一連のベテランの作家たちによって支持され、促進されたこと、この三つである。作家達は作家同盟にも地区の労働者作家にも、自由ドイツ青年同盟(FDJ)の文学活動にも所属しないために、つまり公的組織体に結束されぬために、ここにこの新しい文学の展開を探るのは唯一シュタージという国家機関であったわけである。

この間にフューマンについては着実にシュタージは文書に収める。文化省、党中央委員会の文化部も動き出す。11月4日の月例報告書では「自らを作家とみなし一部の者はフリーに活動する多くの者たちはいかなる連盟体にも所属せずDDRの出版社とも繋がりがみられない。これにてこれらの若い人々への影響の可能性は制約され、彼らは殆どわが国の政治土壌、世界観に立脚しない他の勢力に影響されている」とまとめられる。文化省の手

の及ばないこうした作家としての納税者番号もなく、作家連盟にも所属しない、西の出版社との繋がりなどを持つ若手の作家を閉じこめようとするようになっていく。11月11日には中央委員会書記局の会議がホーネッカー他の首脳フルメンバー^{*20}の参加で行われる。2日に渉る会議で直接取り組んだ論点はアカデミー・アンソロジーの問題であった。第13項では「若い作家と書くことに関心を抱く他の市民作業のための構想」が打ち出され、これをすべての地区に「文学センター」と称するものが設置されることになる。第14項は文化大臣ヨアヒム・ホフマン、中央委員会文化部長ウルスラ・ラクヴィッツも出席のもとで討議された「芸術アカデミーの論集をアンソロジーとして用いようとする作家たち」の問題が取り組まれ、案の定、アンソロジーの最終的アウトラインが最高機関にて定められたのである。参加した作家と一緒に催し物はAdKの主催にしてはならないことも定められる。細分化されたプランは加わった作家との今後の交わり上の基本路線が定められる。三つのカテゴリーに即した分類が決められる。「肯定的な意味において社会主義のために用いられ得るもの」は作家同盟の候補者として獲得され、フリーの作家として国家に反対する活動をとるものは規制された仕事にあてがわれ、「反社会的、国家敵対的に行動するものに対してはそれに見合った法律の適用を受ねねばならない」ことになる。こうした決定の根底には従来の拒否を裏付けるアンソロジーの短い内容分析を形成している。作家たちは「我が党の文化政策によってまとめられる文学に対する期待と要求の埒外にもっぱら位置し」としていると結論付けられ、フューマンに関しては「若い作家たちの発展に有害な見解においてかれらを強化したことは作家フューマンの多大な責任である。かれらを建設的な行動を可能ならしめているいかなる助言も得られず、形式上の視点はかれらのタレントの過大評価へと導く。このことがかれらの幾人かにおいて、かれらのネガティブな立場に導いている。」という見解にいたる。一国の政体が、首脳たちの人的浪費をもって文学の禁止を決定したがるものは何かとも問われよう。文学一般の過大評価、東独外交政治の失敗への危惧、壁に社会主義終焉を描く隣国の「連帯」の勝利などが考えられる。上述した「文学センター設立」なる中央委員会の決定は早くも9日後にベルリンのSEDに文書で伝えられる。しかしこういうものがうまくいったためしが無いように失敗に終わったのである。

注

- * 1. 正式には Gesetz über die Unterlage des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen Deutschen Demokratischen Republik. 略して Stasi-Unterlagen-Gesetz (StUG), 1991年12月20日成立、12月29日発効。
- * 2. vgl. Peter Böhlig u. Klaus Michal: Machtspiele. 1993. Reclam Leipzig.
- * 3. ヴォルフ・ピアマン (1936.11.15.ハンブルク生れ) 父は反ファシストで1943年 Auschwitz で殺害される。1953年東に移住。フンボルト大学で政治・経済学を学ぶ。ベルリーナー・アンサンブルでアシスタント (1957—1959)。再度、哲学・数学を学ぶ。1960年より作詞・作曲を始める。友人等と共にベルリン・労働者・学生劇場を古い映画館を改造して始めようとするが初演の前に禁止される (1962)。1963年まで出国禁止。SED 除名。東ベルリンのキャバレット劇団 (Die Distel) 退団。1965年の ZKdSED の決定でかれに対し出演・出国・出版禁止の効力が発生。11年後の1976年に Prenzlau の福音教会で DDR の観衆の前に出る。1976年西独産別労組 IG メタルの主催する西独演奏旅行。この後再び DDR に戻ろうとするが入国拒否される。同年東独国籍・市民権を剥奪される。これがいわゆるピアマン事件である。以後ハンブルクで暮らし、ときおりパリにも滞在。1982年病気の Robert Havemann を見舞うために DDR 入国を認められる。
- * 4. サシャ・アンダーソン (1953.8.24.ヴァイマル生まれ) 最初は印刷の植字を習う。DeFa で無給見習い。ポツダム映画学校に通う (1974—77)。フリー (1977—78)。守衛 (1978—79) ドレーズデンの教会用務員 (1980)。1981年よりベルリンにてフリー。その後作家活動、雑誌の発行人、催し物の企画者、さまざまなロック・グループでの共演。1971、73、79年にそ

れぞれ禁固刑を受ける。1986年8月15日に西ベルリンに出る。これらの時期のいつ頃 MfS 協力要員となったかは今後さまざまなシュタージの文書からいっそう明らかとなろう。

- * 5. Inoffizieller Mitarbeiter der Stasi の略名。一般に Spitzel と称される。
- * 6. Christa Wolf: Was bleibt. 1990. Luchterhand.
- * 7. vgl. Thomas Anz (Hrsg.): Es geht nicht um Christa Wolf. 1995. Fischer Taschenbuch Verlag.
- * 8. vgl. Thomas Mann, Gesammelte Werke Bd. XII. S. 957.
- * 9. ヴェルター・ヤンカ (1914—1994) 東独アウフバウ出版社主。シュタージの最頂点にいた「ミールケは国際旅団の引き上げ (1938/39) に従軍していたと主張しているが、わたしは引き上げ戦の間にも、1939年2月10/11日のフランス国境を越えるときにミールケの名前は聞いたこともなかったと明白に証言する。引き上げの間に再度前線に配備された国際旅団の残りの者は La Junquera 付近の国境で国際連盟委員会の統制下にあった。第一列に行進していたのは第11旅団参謀将校であった作家ルードヴィヒ・レン、テールマン大隊の大隊長であったフランツ・ラーブ、Etkar-Andre 大隊隊長フーゴ・ウィットマン、491大隊隊長のわたしこと Walter Janka である。エーリヒ・ミールケはそこにはいなかった。」(1992.12.8.ベルリン地裁での証言。europäische ideen. 1993 Heft 81. 参照。) とするようになればシュタージと対決するものであるが、かれこそハンガリー動乱の56年末にルカーチを DDR に連れてこようとした罪で5年の実刑を受けた。
- * 10. Karl Corino: Hermann Kant als Mitarbeiter der Stasi. In: europäische ideen, 1993. Heft 81.
- * 11. Alfred Kantorowicz (1899—1979) 1933年にパリに亡命。1936年スペインで市民戦争に参加。1938年フランスに滞在。1941年ニューヨーク。1946年帰国。1950年—57年フンボルト大学の近代ドイツ文学教授、学部長、芸術アカデミーのハインリヒ・マン資料館、科学アカデミーのトーマス・マン資料館館長を兼ねる。1957年西ドイツへ逃れる。
- * 12. Herrmann Kant (1926—) 庭師を父とする。電気技師の職を習得。終戦間際に召集。1945—1949年ポーランド捕虜生活。収容所内で反ファシズム委員に加わる。1949年以降 SED、FDJ、FDGB のメンバー、1949—1952年グライスヴァルトの大学で労農学部に学び、1952—56年フンボルト大学でドイツ文学を学びその後数年間助手を務める。1957—58年に辛辣的・論駁的な大学学生紙「tua res」の編集に従事、以後作家として活動するほか「ノイエドイチュラント」紙にも寄稿。1969年芸術アカデミー会員。1978年 DDR 作家同盟の副会長5名のひとりとなる。以後会長を務めた。
- * 13. Kontaktperson の略称。この接触要員は拘束力はなくても秘密保持の方法で MfS と接触し、人物情報を提供する。例えば家庭・職場環境を含めて、KP は IM 同様、秘密保持を義務づけられる。
- * 14. Geheimer Informator の略称。1968年まで用いられる。IM に相当する。
- * 15. IM-Vorlauf: IM に募られる予定の人物に関する各種情報の収集。ここではその文書をいう。
- * 16. vgl. Süddeutsche Zeitung Nr. 249., 28.10.1991.
- * 17. vgl. a. a. O., S. 38.
- * 18. Wolf Biermann: Der Lichtblick im gräßlichen Fatalismus der Geschichte. In: Machtspiele, S. 300.
- * 19. Klaus Michael: Eine verschollene Anthologie. In: Machtspiele, S. 205.
- * 20. これ以外に参加した者は Axen, Dohlu, Felfe, Hager, Herrmann, Jarowinsky, Lange, Mittag, Verner, Naumann であった。(In: Klaus Michael, a. a. O., S. 207.)